

## 小学校外国語活動におけるデジタルストーリーテリングの実践と効果

### 研究代表者

藤田 しおり

### 研究分担者

栗原 健

徳田 健介

### 要約

本研究では、小学校における外国語活動において、児童がデジタルストーリーテリングを制作する活動に着目した。新学習指導要領が告示され、小学校における外国語活動の試行が始まる平成21年度4月からの2年間、週1時間の外国語活動で扱ってきた外国語の音声や基本的な表現をムービーメーカーのソフトを利用し、学習の過程を蓄積することによって学習による子ども達の学びを教師がみとることが少しずつではあるができた。また、学習者である子ども達にとっても、自己のふり返しとなることがわかってきた。

このソフトで制作することができる、デジタルストーリーテリングには、子ども達が経験したことや考えていること、思いなどを表現し、伝える特性を持っている。人が生まれ持った言語能力を必要とするため、「表現力」を高めることを目的に、米国でも、あらゆる教育現場にストーリーテリングが導入されている。特に、コンピューターを利用した、デジタルストーリーテリングが導入されている。このコンピューターを利用した、デジタルストーリーテリングは、ストーリーの改善が容易であるので、小学生が友だちと共同的に制作することができた。その時間の確保に、週2時間で設定されている、総合的な学習の時間を利用した。

今後は、外国語活動の時間1時間と、総合的な学習の時間2時間をバランスよく駆使して、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養っていく。」ことを目標にした、小学校における外国語活動を充実させていくことを検証していきたい。

## 1 研究主題設定の理由

今までの総合的な学習の時間において、国際理解に関する学習の一環として取り組まれてきた外国語会話等では、総合的な学習の時間の趣旨から、その目標、内容等は各学校が定め、評価についても観点を各学校が定め、文章による記述を行ってきた。しかし、外国語活動は、総合的な学習の時間とは別に新設され、学習指導要領にその目標、内容等が記載された。このことから、評価の観点は、中・高等学校における外国語科との連続性に配慮して設定される必要があることから、設置者において、観点を設定することになったことに留意しなければならない。

コミュニケーションのツールとしての外国語は存在する。小学校における外国語活動では、限られたツールを使って、コミュニケーションを図り、「外国語への慣れ親しみ」を目標の一つに設定するように文部科学省から(通達)が出ている。しかも、小学校における外国活動では、文字を使わないことを前提としている。

このような条件の下、いわゆる、「コミュニケーションの素地を養う。」という目的達成をねらって、指導者が児童の活動を評価をしていくことは、「行動観察」や「ふり返しカード」に頼ってしまうところが大きい。さらに、「ふり返しカード」も安易に作成するのではなく、検討を重ねていかななくてはならないであろう。授業のねらいを明確にし、「ふり返しカード」で質問する内容も指導と評価の一体化を図らないといけないからである。

従来の教育課程にはなかった「外国語活動」である。この活動が導入されるようになった背景や、めあてや理念とするところを全教員が十分に理解し、児童の指導そして評価へと向かいたいところである。

ようやく、平成22年3月に文部科学省から学習評価の在り方について(報告)され、7月には「評価規準の作成のための参考資料(案)」が出された。これを受け、本校においても「英語ノート」をもとにレッスンごとに評価規準を設定する作業を行っている。評価規準を設定することにより、評価方法や児童の学習状況を判断する際の目安が明らかになり、各時間にどのようなねらいで、どのような児童を育てたいのかがわかる。指導と評価を明確にし、着実に実施していくことが必要である。指導計画に基づいて、単元の目標に応じて観点別に評価規準を設定していこうとしている。

<資料:小学校外国語活動 評価について>

### 「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」

#### [2]小学校「外国語活動」の評価

小学校「外国語活動」については、平成20年1月17日中央教育審議会答申において、数値による評価にはなじまないとされていること等をふまえ、現在「総合的な学習の時間」の評価において行われているような、評価の観点を設定し、それに即して、文章の記述による評価を行うことが適当である。

また、評価の観点は、中・高等学校における外国語科との連続性に配慮して設定する必要がある。具体的には、学習指導要領に定める「外国語活動」の目標、すなわち、言語や文化に関する体験的な理解、コミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことについて観点を設定し、学習評価を行うことが適当である。

**「英語ノート1 指導資料」(文部科学省)より、目標に基づく3つの観点からの評価規準例(抜粋)**

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。

- ・外国のマナーを理解する。(L1:行動観察)
- ・様々な数え方のジェスチャーがあることを知る。(L3:行動観察)
- ・世界には多様な言語があることに気付く。(L3:行動観察)
- ・世界には様々な衣服があることを理解する。(L5:行動観察)
- ・漢字の成り立ちの面白さに気付く。(L7:行動観察)
- ・外国語の小学校で、どのような教科が学習されているか理解する。(L8:行動観察)

外国語を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。

- ・積極的に様々なあいさつを言おうとしている。(L1:行動観察)
- ・進んでジェスチャーを付けて挨拶しようとする。(L2:行動観察)
- ・自分の様子をジェスチャーを付けて相手に伝えようとしている。(L2:行動観察)
- ・自分の好きなものを含めて自己紹介をしようとする。(L4:行動観察)
- ・好みをはっきり言おうとしている。(L5:行動観察)

外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

- ・1から10までの数字を言ったりしている。(L3:行動観察)
- ・20までの数字を聞いたり、言ったりしている。(L3:行動観察)
- ・外来語のもとである英語を実際に発話している。(L4:行動観察)
- ・指導者の話す様々な衣服言い方を聞いたり言ったりしている。(L5:行動観察)
- ・相手が気持ちよく買い物ができるように声かけしている。(L5:行動観察)
- ・外来語との音の違いに気づき、英語の音を意識して発音している。(L6:行動観察)
- ・自分の欲しい食べ物をメニューから選んで答えている。(L6:発表観察)

**「小学校学習指導要領等に関する移行期間中における小学校児童指導要録等の取り扱いについて(通知)」 (平成20年12月25日文部科学省初等中等教育局長通知)**

評価に当たっては、外国語活動で行った学習活動及び当該活動に関して指導の目標や内容に基づいて定めた評価の観点を記載した上で、それらの観点到照らし、児童の学習状況における顕著な事項などを記入するなど、児童にどのような態度が身についたか、どのような理解が深まったかなどを文章で記述すること。その際の評価の観点について、文部科学賞発行「英語ノート指導資料第5学年」「英語ノート指導資料第6学年」に示した「評価規準例」を参考とすることが考えられること。



「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善などについて(通知)」(文部科学省初等中等教育局)

学習指導要録<小学校 外国語活動の記録>

観点 : コミュニケーションへの関心・意欲・態度

趣旨 : コミュニケーションに関心を持ち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。

観点 : 外国語への慣れ親しみ

趣旨 : 活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。

観点 : 言語や文化に関する気付き

趣旨 : 外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることに気付いている。

一つは空欄。各学校が独自に観点を追加してもよい。

これらの文部科学省からの方針では、コミュニケーションの素地作りをねらいにおきながらも、「英語の音を意識して発音」「外国語の音声や基本的な表現」「外国語科との連続性」という言葉が見られる。これは、外国語活動が、英語という言葉ツールにする限り、スキルの部分を避けることはできない特性があるからである。さらに、中・高等学校における外国語科との連続性に配慮して設定される必要があるからである。つまり、担任教師による「行動観察」や「ふり返りカード」だけでは、外国語活動の評価を見取ることが困難で不十分ではないかと考えられる。

コミュニケーションへの関心・意欲・態度

外国語への慣れ親しみ

言語や文化に関する気付き

が、外国語活動の観点別であるので、「行動観察」を効率よく行うとすれば、授業中での具体的な姿を必ず記録する必要がある。しかしながら、全てを見取るとは難しいので、新しく「ふり返りカード」を指導要領に準じて作成し、毎回、記録をとっていかなくてはならないだろう。

このように極め客観的に見取る評価方法が少ないのが現状である。「コミュニケーションの素地を養う」という目標からぶれない評価として、他にどのような評価方法が考えられるのかを具体的に示す、本校独自の「指導と評価の計画」の作成が必須になってきている。

また、新しい教育活動である「外国語活動」は、教科として位置づけられておらず、教科書が存在しないことや、小学校段階の外国語活動が導入されることは初めてのことであるので、導入を前に、小学校の現場では、教材整備や教員の授業づくりに関わる研修が優先されている。そのために、評価に関わる研究が後回しになっているという現状がある。しかし、PDCA サイクルで、教育活動を進めていくことを考慮すると、評価方法の改善は急がなくていけないであろう。

外国語活動では、外国語でのコミュニケーションの体験を通して、言葉の大切さや豊かさ等に気付かせ、言葉の大切さや豊かさ等に気付かせ、言語に対する興味・関心を高めたり、積極的に自分の思いを伝えようとする態度等を養ったりすることをねらいとしている。そのため、このような学習状況や成果などは、子どもの様子や態度等を踏まえて評価することが欠かせない。そのために行動観察が重視される。しかし、行動は瞬時に流れてしまい、形に残らない。指導者が、子どものよさを活動で見取り、どのような力が身についたかを客観的に判断する評価方法が大切になってくるのではないかと考える。そのために、新しい評価方法を模索していきたいと考えた。

さらにこの時、留意しなければならないことは、「積極的に話した」という、「積極的」の度合いである。児童が、普段からおとなしい性質であるとか、あるいは、よく人と関わる姿が日常的に見られる性質である等、普段の様子も考慮していかなければならないことである。つまり、今までできなかった交流ができたなどは、目標が達成できたと考えることができる。単純に、人とのグリーティングが多かったら、関心・意欲・態度が優れているとは判断できない。このようなことから、より客観的な評価方法として、ICT の活用が考えられるのではないかと考える。その一つとして、デジタルストーリーテリングの活用を近隣の三重大学からも支援を受け取り入れ実践してきた。

そこで、研究テーマを「小学校外国語活動におけるデジタルストーリーテリングの実践と効果」と設定した。

## 2 研究目標・内容

### (1) 仮説

文字を使わない小学校における外国語活動において、コミュニケーションの相手を決めて、学んだ限られた会話と静止画像を使ったデジタルストーリーテリングを作成して、自分の思いを伝えることは、子ども達の外国語活動の目標である、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」と「外国語への慣れ親しみ」をよりよく達成させることを助け、指導者にとっても、子ども達が目標を達成していく過程を評価する一つの手立てになるであろう。

### (2) 研究のねらい

デジタルストーリーテリングが、児童にとって、外国語活動の目標を達成する手立てであり、指導者にとって、子どものよさを活動で見取り、どのような力が身についたかを客観的に判断する有効な新しい評価方法であることを検証する。

### (3) 研究の方法と内容

#### 方法

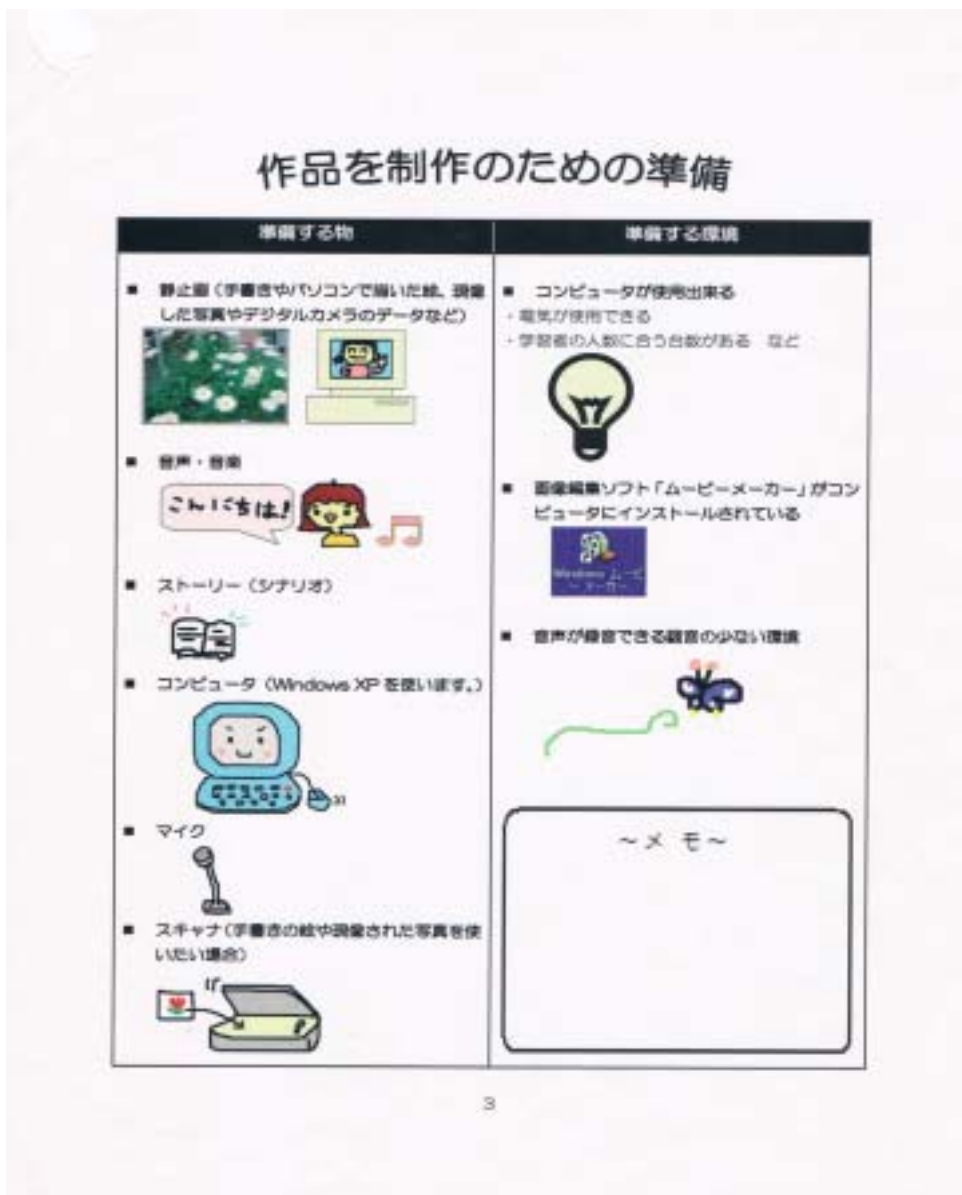
外国語活動の時間の中では、スキルであり、伝えるツールである会話に慣れ親しみ、ALT や友達、HRT に伝えながら、ツールを獲得していく。

総合的な学習の時間に、人間関係形成能力や情報活用能力を目標におき、英語ノートの中で学んだ会話を組み合わせて、伝えるに相手に合わせて、自分のことを伝えるメッセージのプロットを作成し、デジタルストーリーテリングを作成する。(1回の作成につき4時間 年間3回作成で 4×2時間)

## 具体的な方法

三重大大学の大学院生の支援で、次のマニュアルを見ながら作成することができた。また、一人一台パソコンが西が丘小学校に配備されたので、効率よく、自分のプロットに沿ったストーリーを作成できた。

(資料 デジタルストーリーテリング作品作成マニュアル 監修:須曾野 仁志)



ソフトを起動させる

写真や画像を選んで、作品のプロットを作成する

音声を録音して読み込む

静止画を取り組む

静止画と音声を合わせる

作品を保存する

画面切り替え効果・特殊効果で工夫する

タイトルを入れて工夫する

この三重大学で制作されたマニュアルは、子ども達にも大変わかりやすく、大きな支援になった。また、苦手な教員も、このマニュアルが大変役立った。また、何度も作成していく中で、子ども達もマニュアルなしでも作成できるようになった。課題として、画像と音声を合わせる作業で、音声小さく録音されているとなかなか聞き取りにくく、困難であったので、大きな声を録音することが大切であることがわかった。しかしながら、6年生にとってこの作業は、考えた以上に簡単にできることがわかったので、新しい評価方法の一つとして、考えられるデジタルストーリーテリング作成であることが検証された。

## 内容

ここでは、3つの取り組みを紹介していく。

<実践例 1> 教育実習の先生のアメリカの友達の学校へ送った DST。

DST 作りに支援していただいた学生さんにも DST 鑑賞会に招待した。

アメリカからの返事に益々、「外国語への慣れ親しみ」の目標に近づくことになった

英語ノート1から、【This is me!】と称して

My name is .

I like blue. (Lesson 5)

I like Japanese. (Lesson 4)

I don't like math.

Thank you. と紹介した。

(右写真)

自分達の DST を手紙で送ろうと意気込む子ども達

人との関わり(交流)を目指した小学校における外国語活動



## This is me! の取り組み 2009年度



その友達に聞いてみないとわからないような答えを引き出す自己紹介として、このデジタルストーリーテリングを作成した。相手のアメリカの学校から、返事が届いたことで、子ども達は英語で伝えることができた喜びを達成感として持つことができた。また、それは、自尊感情を高め、もっとたくさんの人と交流したくなり、プラス循環で、コミュニケーションの素地が作られていく結果となった。

## 言葉を使う体験を十分に！自分の思いを伝えるために。



## プラス循環で、コミュニケーションの素地が作られる

著：藤田 しおり 三重県熊野市小学校英語教育推進事業研修講座資料(2010.1.5.)

### <実践例 2>

支援米と共に自分たちの米づくりの過程を DST にしてアフリカのマリ共和国へ贈った事例  
さらに、下級生に DST のプレゼンテーションで、支援米づくりを紹介し、次の学年にもこの  
取り組みを続けて欲しいと伝える活動

Hello! This is our guests.  
This is our rice field.  
Our rice field are growing.  
We harvest our rice.  
We write a message.  
This is for you!!





今回は、英語ノートに直接出てくる会話文ではなく、アレンジしたものを使用した。しかしながら、どうしても次の学年にも国際交流のために支援米の取り組みを続けて欲しいという思いでデジタルストーリーテリングの作成に取り組んだため、新しい会話文を ALT に教えてもらいながら、心からのメッセージとして発話することができた。デジタルストーリーを見ると、「外国語への慣れ親しみ」は十分に達成されたと理解できるほど、発音もすばらしいものがたくさんあった。

Hello ! This is our guests.



支援米を作る田んぼをかしてくださる、近所の農家の方々です。

この活動の一番初めに、招待してお礼を伝えました。

たくさんのコミュニケーションに支えられていることが、画像と音声で伝わってくるデジタルストーリーテリングです。

This is our rice field .



This is our sign.



お借りした田んぼに手作りの看板を立てます。  
マリ共和国の国旗を描いています。

Our rice field are growing.



We harvest our rice.



自分達が登場してくる静止画像は、マリの国への力強いメッセージになり、より伝えたいという思いから、スキル面も気をつけようとする成果物がたくさんありました。

<実践例 3> 自分たちを卒業まで育ててくださった家族へ送った DST。

最後の学年活動で、DST を手渡しました。

英語ノート2から、4つの会話を絵にして、12歳の自分について紹介しています。



日本が大好きな児童の絵です。



野球が得意な児童の絵です。



バレエを習っている児童の絵です。



水泳を続けている児童の絵です。

マイケルジャクソンが大好きで、  
いつも物まねをしてみんなを楽し  
ませることができる児童の絵です。



どの子ども、自分のありのままを絵に表現しています。6年生になって、英語ノート2を学びます。そこから学んだ会話文で、5年生よりもさらに深く自分のことを紹介しています。

下の様なピクチャーカードで学んでいるので、絵を見て、自然と英語という言葉が出てくる用になっている。決してカタカナに直して棒読みをするということはない。

文字を使わない小学校における外国語活動では、デジタルストーリーテリングの絵は、大変有効だと感じる Show & Tell の活動である。

下のような順番で子ども達は絵を描いている。40人のどの子ども、その子らしさが出ており、同じ絵はない。自分のことを伝えるから嬉しいのである。そして、両親に、日本語ではなく英語というツールで自分のことを紹介できることに自尊心を持つことにつながっている。

発音も5年生の時と比べて、随分聞き取りやすくなっている。音声の成果物を残していくことで、学びの過程をしっかりと確認できる、デジタルストーリーは、保護者にとってもかけがえのない子どもからのプレゼントになっており、心の交流があたたかい。

Lesson3 My birthday is March 3<sup>rd</sup>.



Lesson4 I can swim.



Italy.

Lesson7 I get up at 7:00a.m.





【  
12  
歳

の私]と称して、春の進級記念写真・修学旅行・遠足・運動会・連合音楽会等、1年の中で思い出に残った行事の写真を3枚選んで、This is .と紹介していくプロットである。最後に、日

本語で、お家の人へ、12年間の感謝を思い思いに音声にして取り込み、小学校生活最後のデジタルストーリーを作成した。静止画像に、子ども達の12歳という今しかない声を吹き込み、学びの様子を英語というツールで表現しながら、保護者との伝え合いができた。保護者からの返事がうれしかった児童もたくさんみられた。

少ない語彙ではあるが、英語ノートは、機能シラバスのチャンク(固まり)の会話で構成されている。つまり、

人と関わるインタラクティブな気持を包括していると考えられる。そのため、小学生が英語を使って自分のことを語り、自信をつけるのに適している。

授業の中では、Show & Tell という活動で、クラスの仲間や ALT の目を見て、笑顔と聞きやすい声、ジェスチャーでコミュニケーションをとらせている。・ I don't like this. という表現は、子どもが自分の嫌い物、苦手な物を出されてときに、黙っていないで自分の思いを言えるようにしたかったので、Show & Tell にあえてストーリーのプロットに入れ、真のコミュニケーションができるようにこれからも支援していきたい。

その一方で、デジタルストーリーという形で残していきたい。デジタルストーリーという成果物は、子ども達が自分自身の発音の様子をふり返ったり、指導者が評価したりすることができた。デジタルストーリーをふり返らせる際に、言葉によらないコミュニケーションの手段もコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、ジェスチャーなどを取り上げ、その役割を理解させるようにすることもできる。

何より、さらに、もう一枚作成していこう、さらに発展的な学びを得たいという前向きな児童を創り上げることができたように感じる。



子どもは、発展的に学びたがるものである。しかし、指導者は、我慢も必要である。スパイラル方式で、十分に定型表現をインプットさせることを意識させていきたい。少しずつ型を変え、ペア会話、リレーゲーム等を駆使し、何度も何度も聴かせ発話させ、十分に水がしみこむようにインプットしてから、発展の扱いへ移行させていくことが大切であると感じている。子どもは、大人が考える以上にくり返すことに忍耐強い性質を持っている。十分なインプットを優先させ、先を急がせないようにしていきたい。

この時、発展的に発話する児童を無理に止める必要はないことも確認しておきたい。そのためにも、デジタルストーリーテリングの作成回数を増やし、少しずつ学びの過程をふりかえらせる事も大切であると考え。そのことは、何より子どもが安心して外国語活動に取り組むことにつながっていくであろう。

さらに、1時間を毎回同じ流れで立案するという工夫も大切である。それは、何より子どもが安心して取り組むことができる。この過程を越え、学んだ表現が一通りスラスラと言えるようになってから、応用・発展として、総合学習の中で出てくる物の名前や活動(例えば、田んぼとか、稲刈り等)を扱っていくことが、子ども達の英語嫌いをふせぐことになると考える。そのような目標・実践・評価・新しい実践というPDCA サイクルで外国語活動を進めていくことが、通じる英語 = 使える英語を身につけ学ぶことになるであろう。

### 3 成果と課題

子どもの学習のすべてをファイルして記録していく、ポートフォリオは今までも、my special lunch や my special daily routine ,my favorite schedule など、自分の好きなもので構成させて、残してきた。これらは、いわゆる成績表のように、保護者に学習状況を伝える際に役立つという利点もあった。

しかし、学習の結果だけでなく、学習過程も記録できることを大切にすることで、デジタルストーリーテリングを使うことは、音声中心の小学校における外国語活動では、有効であった。それは、子どもにとっても、評価する教師にとっても有効であった。

言葉は、場面の中にあってこそ意味を持つものである。ある時は、外国の友達へ、ある時は、学校の下級生へ、ある時は、12年間育ててくれた両親へ届けるという場面の中にあってこそ意味を持つものである。言葉は、場面とは切り離すことができない。外国語活動の中で扱う、三種の神器と言われた、歌・ゲーム・チャンツは言葉を獲得する手段である。新三種の神器というのが、smile and gesture・clear voice・eye contact ではないだろうか。あえて言うなら、シチュエーションを考えながら、表情豊かに適切な相手に届く声で、意味を考えながら目を合わせて、交流することだと感じる。以下の資料1資料2からも、子ども達が、コミュニケーションをするために、英語を使おうとしていることがわかる。

(資料1)

回答(選択項目)	質問 もし、あなたに外国人が英語で話しかけてきたらどうしますか？(%)		
	H21. 2 5学年時	H22. 2 6学年時	H22. 6 中1(現在)
英語でうけこたえをする	6	33	47
日本語でこたえる	56	60	43
だまっている	27	4	1
その場から逃げる	11	3	9

(資料2)

回答(選択項目)	質問 外国の人と英語で手紙やメールのやりとりをしたい？(%)		
	H21. 2 5学年時	H22. 2 6学年時	H22. 6 中1(現在)
やってみたい	31	27	36
どちらかといえばやってみたい	22	30	27
どちらかといえばやってみたくない	22	27	16
やってみたくない	20	11	14
わからない	5	5	7

以前は、とにかくプレゼンテーションが大切であると考えていたので、子ども達に、たくさんの発表会的なことを活動の最後に取り組ませていた。しかし、伝える相手は、舞台の前にいる不特定多数のお客さんでは、逆に英語嫌いを作ってしまった。結果的に、機械的な発話のくり返しを強要することに繋がっていったからである。

しかし、自分のオリジナルのデジタルストーリーテリングを作成することは、同じプレゼンテーションでも、子ども達がいきいきする活動になった。それは、教師側も外国語活動の目標の捉え直しをすることであった。伝える相手を子ども達に明確に持たせることで、目標である「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を高めるのである。どうしても、伝えたいという子ども達の思いは、デジタルストーリーテリングの作成の回数を重ねるごとにふくらみ、「外国語への慣れ親しみ」が高まり、「外国語の音声や基本的な表現」がより身につき、「外国語科との連続性」が達成されていくことが検証された。

そして、教師側は、そのデジタルストーリーテリングという成果物から、子ども達の「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」が容易に評価できるのである。さらに、「行動観察」や「ふり返りカード」だけでは、評価しにくかった子ども達の発話の様子が、成果物から評価できるということが大きな効用だと感じた。つまり、子ども達が相手に伝えたいという強い思いによって、言葉を獲得していく過程も評価できるので、「外国語への慣れ親しみ」の度合いも容易に評価できるという効果も検証された。新しい評価の柱と考えられる。

課題としては、ICT 環境の整備、教師の ICT 指導力の向上が残った。複数の学級の全員で作成するデジタルストーリーテリングを、もっと気軽にシンプルに作成していくには、さらなる全ての教師の ICT 指導力の向上が必要である。

しかし、近隣の大学との連携でこの取り組みを行ったことは、新たな人との交流を生み出している。そのコミュニケーションの効用は計り知れない。今後は、学校の組織力を高め、効果的・効率的な教育を行うために、教育内容の目標に向かう確かな学力を確立するとともに、情報活用能力など社会の変化に対応するための子どもの力をはぐくんだり、ICT 環境の整備、教師の ICT 指導力を向上させたりすることが重要である。そして今後も、評価のための評価にならないように機能的でシンプルな小学校における外国語活動のより客観的な評価を模索していきたい。

#### 【実施場所】

三重県津市立西が丘小学校

#### < 引用参考文献 >

監修:須曾野 仁志 著:鏡 愛「デジタルストーリーテリング作品作成マニュアル」(2007年6月)

著:文部科学省教育課程課「初等教育資料」(東洋館出版社 2009年3月 )

(東洋館出版社 2011年4月 )

編著:直山木綿子「小学校外国語活動モデル事例集(教育開発研究所 2011年2月 )

第6回・第8回、三重県小学校英語活動研究会資料(三小英研)

参考ウェブページ Dr.Helen Barrett's electronic portfolios : <http://electronicportfolios.com/>